

平成25年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-13-3/5）

第47回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で47回目を迎えた。昨年度同様、本年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。「モノ／イメージとの対話」をテーマに掲げ、個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ207人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、185人から回答を得た（回収率：89%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」77人、「おおむね満足した」81人、「普通だった」12人、「不満が残った」6人、無回答9人、回答者の85%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2013（平成25）年10月4日（金）13：30～16：30、東京文化財研究所 セミナー室

- ・小林達朗（東京文化財研究所）「平安仏画の表現―虚空蔵菩薩と千手観音像―」

平安時代・12世紀、日本の仏画は、微妙な色彩の変化と金銀箔をきわめて細く切った截金による繊細な文様表現による独特の美しさを実現した。東京文化財研究所では、東京国立博物館との共同調査により、同館所蔵の平安仏画の高精細画像による共同調査を行っており、本講演では二つの国宝仏画からこれまでに得られた調査成果の一部をご紹介します。細部を観察できる高精細画像の意義、またそこから考えられる美術史的問題、ことに平安仏画における金銀の使用法と絵としての表現の関係について考察した。

- ・鄭于澤（東国大学校大学院教授・同大学校博物館館長）「高麗仏画の表現―凝縮された美―」

韓国における仏画は、14世紀を中心とする高麗時代後期に制作された作品が比較的多く現存し、独特の美しい世界を見ることができると言える。その衣服の表現には、金泥を使った細密な文様、多種多様な装身具が描写されるが、それ以外の部分には限られた種類の顔料で描くという特徴がある。この顔料の単純さは金泥をよく生かし、効果を極大化しようとする意識につながっている。画面全体に神秘的なまでの雰囲気がかもしだす高麗仏画の表現が、どのように構成・実現されているのか、詳細な画像を中心に歴史的見地も交えて紹介した。

第2日：2013（平成25）年10月5日（土）13：30～16：30、東京文化財研究所 セミナー室

- ・小林公治（東京文化財研究所）「螺鈿を訪ねて西へ東へ―5000年の世界史を探る―」

メソポタミア文明や中国文明の出土品を最古の事例とする螺鈿は、唐時代以降、東アジアの中国・韓国、そして日本で発展を遂げた。しかし近年、これら以外の沖縄や、ベトナム・タイ・カンボジアなどの東南アジア、そしてインド、トルコ・シリアなどの南・西アジアにも存在することが明らかとなり、さらにアジアの影響を受けた西ヨーロッパや、南太平洋・北アメリカ北西海岸にも独自の発想らしい螺鈿が存在することが判りつつある。本講演では、世界各地の螺鈿を紹介しながら5000年の螺鈿史について考察を行った。

- ・二神葉子（東京文化財研究所）「世界遺産―現状と問題、将来像―」

1972（昭和47）年に世界遺産条約が成立して以来、世界遺産リストに記載された資産は1000近くになる。2013（平成25）年は富士山が記載され、正式決定前から連日報道が行われたが、世界的にも世界遺産への関心は高いものがある。しかし、そのために世界遺産が国際問題を引き起こし、国際紛争に巻き込まれ損傷を受けることさえある。世界遺産の現状と問題、その将来について、2013年カンボジアで開催された世界遺産委員会の様子とともに紹介した。